

パートナー霞ヶ浦クリーン UP 自主活動（令和3年度前期報告）

□令和3年度前期活動実績

パートナーの身近な活動として「きれいな霞ヶ浦」をテーマに、ご賛同いただきましたパートナーやセンターのご協力をのもと、霞ヶ浦湖岸（2.3km）のゴミ拾いを実施いたしましたので、結果を報告いたします。



令和3年5月は雨天のため中止。6月、8月、9月と新型コロナウイルスの影響により活動が中止となり、わずかに4月と7月の2回だけの活動となりました。

そのような状況でも、新たに活動に参加するメンバーも迎えることができ、活動の意欲が増しました。

活動時は、釣り・ウォーキング・サイクリング等で湖畔に来られる方に挨拶を心がけ、一人でも多くの方が環境に関心を持

っていただけたらと願っています。

少しでも霞ヶ浦の環境改善にお役に立てるよう、これからも皆で頑張っていきたいと思います。

- ・回収総量：11袋（回収の内訳は可燃→8袋 不燃→3袋）
- ・参加者延人員：10人

*湖岸に漂着するゴミを見ると、霞ヶ浦全体としてのゴミの量は、まだまだ多いですが、有料化の影響かレジ袋が減ったように感じます。霞ヶ浦流域の一人ひとりの環境への配慮が引き続き必要だと感じました。

□令和3年度前期活動実績と今後の計画

- ・活動日は毎月1回、年12回
 偶数月：第3日曜日→4/25、10/17、12/19（6月、8月中止）・令和4年 2/20
 奇数月：第3金曜日→7/16、11/19（5月、9月中止）・令和4年：1/21・3/18
- ・時間：9時～11時頃、実施区域、作業内容は従来通り。

今後も、パートナー有志による活動を、センターのご支援を得ながら継続したいと思います。

皆さまのご参加をお待ちしています。

（パートナー 佐伯）

2021 年度前期「霞ヶ浦湖岸植物定点観察活動」の報告

絶滅が危惧されるアサマスゲ、ヤナギトラノオ、ノウルシなど希少な植物が見られたが、特定外来生物ではオオフサモ、ミズヒマワリ、アレチウリ、オオバナミズキンバイの繁茂に加えて、オオカワヂシャ、ナガエノツルノゲイトウが新たに出現した。

月/日	ABEFGHKL 区観察概況 (I B・II:絶滅危惧 I B 類・同 II 類、準:準絶滅危惧、特外:特定外来生物)
R 3 4/15	マルバヤナギやノウルシ(国県準)の葉や花序の黄色が湖岸を彩り、法面でオドリコソウ、トウダイグサ、ノヂシャ、スイバ、マツバウンラン、 アサマスゲ (国県準 I B)が満開だった。低地に群生するオニナルコスゲ、カサスゲ、ヌマアゼスゲ(国 II 県 I B)も花穂を付けた。水辺でカワヤナギやタチヤナギは早々と柳絮を飛ばしていた。
5/12,13	満開のノイバラやスイカズラが薫る湖岸で ヤナギトラノオ (県 II)が外来種のキショウブやツルマンネングサと共に黄色い花を付けた。ジョウロウスゲ(国 II 県準)、ミコシガヤ、アゼナルコが特徴ある花穂を出した。A区の自然堤水際で花を付けたオオカワヂシャ(特外)が出現し、H・L区にも侵入した北米原産イタチハギが増殖して開花した。
6/10	梅雨入り前の湖岸でヨシやオギが一気に伸長し、改修2年目のB区低地でミコシガヤやカズノコグサと共に ジョウロウスゲ (国 II 県準)が多数出現した。D区法面で群生するイヌドクサが孢子囊穂を付け、EG区で群生するハンゲショウは蕾を付け葉の白化が始まった。L区堤脚水路で伸長したオオフサモ(特外)の葉腋に白い雌花が付いた。
7/14	梅雨明け間近で白いハスの花が清々しい。弁天周囲でクズ、メマツヨイグサがB区でタコノアシ(国県準)やハッカが開花した。観察地で ミズヒマワリ (特外)の生育地が拡大した。H区でノアズキ(県準)、エゾミソハギ、オオバナミズキンバイ(特外)が、K区堤内でオグルマ、ヤブカンゾウ、川尻川沿いでタンキリマメ(県 II)、ヤブマオが開花した。
8/6,9, 12,18, 19,21	厳しい暑さが続く中で立秋を迎えた湖岸はヨシの出穂が見られ、水際でシロバナサクラタデの群生が開花した。ミズアオイ(国県準)が開花しクロテンツキが穂を付けた。葉を盆産にするマコモが花を付けエゾミソハギは満開だ。熱帯米原産ヒレタゴボウが開花、先月J区で初確認した ナガエノツルノゲイトウ (特外)の侵入をE区でも確認した。
9/9,10, 13,14	法面でアキノエノコログサやキンエノコロが緑色や黄金色の穂を揺らし、ニラの白い花やツルボのピンクの花が満開だ。ヨシや低木にも絡んで伸び他の植物を覆うように繁茂する アレチウリ (特外)が雄花と雌花を付けた。大きな円錐花序に雄花を付けたカナムグラと背の高いオオブタクサが茎先に伸ばした雄花序から花粉を飛ばしていた。



4月**アサマスゲ**(カヤツリグサ科)多年草
K区裏法の堤脚水路沿いに群生する。



5月**ヤナギトラノオ**(サクラソウ科)多年草
湿地に生え氷河期の遺存植物と言われる。



6月**ジョウロウスゲ**(カヤツリグサ科)
利根川・霞ヶ浦周辺では比較的多い。



7月**ミズヒマワリ**(キク科)多年草
中南米原産で栄養繁殖が極めて旺盛。



8月**ナガエノツルノゲイトウ**(ヒユ科)
南米原産多年草。花穂に柄がある。



9月**アレチウリ**(ウリ科)蔓性1年草
北米原産。刺のある実が球状に付く。

霞ヶ浦湖岸の散策などで見られる「絶滅危惧種」等、希少な植物たち

霞ヶ浦湖岸では「絶滅危惧種」等、希少な植物たちを見ることができます。散策するにはよい季節となりましたので、機会がありましたら希少な植物たちを観察してください。



[11月] セイタカヨシ(背高葦)イネ科 多年草
県準絶滅危惧種。ヨシより草丈が高く、葉先が斜上。



[12月] カンエンガヤツリ(灌園蚊帳吊)カヤツリグサ科
国絶滅危惧Ⅱ類、県準絶滅危惧の1年草。花序が緑褐色。



[1月] タコノアシ(蛸の足)タコノアシ科 多年草
国、県準絶滅危惧。地下茎と種子で増殖する。

[注記-1]「絶滅危惧種」とは、急激な環境変化や乱獲などにより、絶滅に瀕している動・植物の種(広辞苑)を国や県が保護を目的に公表しているもので、これらの中には採取や移動が制限されているものもあります。

[注記-2]「霞ヶ浦湖岸植物同好会」は、茨城県霞ヶ浦環境科学センター所属のパートナー(ボランティア)で自主企画活動の「湖岸植物定点観察」を行っているメンバーの集まりです。興味のある方・何時でも参加下さい、お待ちしております。定例日は毎月第3水曜日です。

霞ヶ浦湖岸植物同好会 (パートナー 有吉)

第18回身近な水環境の全国一斉調査結果報告

活動のねらい

本活動は平成25年6月の「第10回身近な水環境の全国一斉調査」から続けて参加している活動です。

第18回(令和3年)で連続9回参加しています。活動のねらいは次のとおりです。

- 1、統一的なマニュアルに基づいて河川流域の多くの人たちが調査するので、面的につながりのある結果が得られる。
- 2、調査に参加した人たちとの連携を深めることができる。との背景からパートナー有志が参加しています。

○調査の概要

調査日及び参加者数：令和3年6月6日(日)7名(パートナー小松、杉山、栗原、西條、目次、森田、浅野)

調査内容、方法：統一調査マニュアルに基づく気温、水温、試水水温、パックテストによるCOD測定、透視度、電気伝導度を調査しました。この他、特記事項として水辺の状況・流れ・濁り・散乱ごみ・川の変化についての意見(今と昔)、を実施しました。

調査地点：調査地点は、第15回、第16回、第17回調査と同じ地点としました。

第18回：桜川（禊橋）、清明川（阿見橋）、小野川（下根大橋）、巴川（新巴川橋）

○調査結果

調査地点	調査年月日	天候	気温(°C)	試水水温(°C)	透視度(cm)	EC mS/m	T-N mg/l	T-P mg/l	COD測定値(mg/l)		
									1回目	2回目	3回目
桜川 (禊橋)	H30.6.3	晴	28	26	57	22.3	—	—	8以上	8以上	8以上
	R1.6.2	曇	22	22	58	27.2	—	—	3	3	3
	R2.7.5	曇	27.5	22	37	19.9	—	—	2	1	2
	R3.6.6	曇	23	21	30	20.1	—	—	4	4	4
清明川 (阿見橋)	H30.6.3	晴	30	23	100以上	34.0	—	—	5	5	5
	R1.6.2	薄曇	28	21	100以上	31.0	—	—	3	3	3
	R2.7.5	曇	24	22	100以上	23.8	—	—	2	2	2
	R3.6.6	曇	22	21	98	28.8	—	—	3	3	3
小野川 (下根大橋)	H30.6.3	晴	26	20	31	25.0	—	—	8	8	7
	R1.6.2	薄曇	28	24	98	24.7	—	—	5	5	5
	R2.7.5	曇	21	16	93	20.0	—	—	3	3	3
	R3.6.6	曇	23.5	20	55	23.8	—	—	3	4	4
巴川 (新巴川橋)	H30.6.3	晴	30.5	24	45	26.5	—	—	7	8	7
	R1.6.2	曇	25.0	20.0	41	30.2	—	—	7	5	5
	R2.7.5	曇	20.0	19.0	44	21.3	—	—	4	5	5
	R3.6.6	曇・小雨	23.5	20	51	27.3	—	—	5	5	5

※EC：電気伝導度を表す、数値が低いほど良い。T-N：全窒素、T-P：全リンを表す。COD：水の汚れ具合を表わし、数値が低いほど良い。

特記事項

桜川（禊橋）～農業用水をためていた。

清明川（阿見橋）～水清澄、鯉遊泳、流れ速し。水底には水草がただよっている。周辺には蝶が舞い、車の騒音が途絶えると鳥のさえずりも聞こえる。ひと頃に比べると、水環境が改善されている。

小野川（下根大橋）～一昨日の降雨の影響で濁っていた。流れゆるく両岸草木繁っていた。浮きごみなし。魚影なく小鳥の鳴き声聞こえず。橋上通行の自動車たえまなく続き、自動車騒音はげしかった。

巴川（新巴川橋）～水流あり（少し速い）。浮きゴミなし。小鳥の鳴き声あり。

○活動状況の写真



清明川(阿見橋)R3.6.6



小野川（下根大橋）R3.6.6



巴川（新巴川橋）R3.6.6

(パートナー 浅野)

芭蕉は、深川に居を移した後、「おくのほそ道」の前に旅に旅を重ね、「野ざらし紀行」「鹿島詣」「笈の小文」「更科紀行」などの紀行文をしたためている。

「鹿島詣」は、貞享4年(1687)8月、弟子の曾良と宗波を伴い鹿島を訪れた折の紀行文である。同行の曾良については既に述べたが、本名：長島藩の河合惣五郎、芭蕉庵の傍に住んでいつも芭蕉の世話をしている。吉川神道を究め、晩年は幕府の九州巡見使随員となる曲者でもある。水雲の僧と記された宗波は、臨濟宗、本所定林寺の住職で、仏頂禅師から薫陶を受けているので、この旅の随行は納得できる。

仏頂禅師はこのとき鹿島に居り、この和尚のもとで、共に月見をしようとの旅であった。

芭蕉らは、深川の芭蕉庵より行徳まで小名木川を船で、そこからは徒歩で八幡を経て、鎌ヶ谷(当時は鎌谷の原という野であったらしい)を通り、今でいう木下(きおろし)街道を経て利根川沿いの布佐へと至る。布佐に着いた時には既に日暮れ時であった。布佐で鮭漁の漁師の家で休もうとしたが、あまりにも生臭いため、舟を頼んでその夜のうちに鹿島へ直行した。翌日は十五夜であるが、昼から雨が降り出し、折角の名月も見ることにはできず、和尚の住まいに泊まり込んだ。明け方、空が少し晴れたところで和尚が起こしに来てくれた。「月の光、雨の音、ただあはれなるけしきのみむねにみちて、いふべきことの葉もなし」

ここで、仏頂禅師の一首	おりおりにかはらぬ空の月かげもちぢのながめは雲のまにまに	
さらに、芭蕉の二句	月はやし梢は雨を持ちながら	桃青(芭蕉)
	寺に寝てまこと顔なる月見哉	同
そして	雨に寝て竹起かへるつきみかな	ソラ(曾良)
	月さびし堂の軒端の雨しづく	宗波

本紀行文では、芭蕉の二句に続く曾良と宗波の句、さらに【神前】、【田家(でんか)】、【野】と題した三人の句が置かれ、最後に、「帰路、自準に宿す」として、主人(自準)・客(芭蕉)・ソラ(曾良)の三句が記されている。



芭蕉らは、次の日に鹿島神宮を拝し、帰路、自準の家立ち寄ったようであるが、詳細は記載されていない。【神前】とは鹿島神宮参拝、【田家】、【野】と題されているのは、帰路に見た田舎家や野での句作であろう。記載があまりにも簡潔であるため、本紀行文にはいろいろな憶測がなされている。

まず、芭蕉らが訪ねた仏頂禅師の居所はどこか？ 大方の見解は鹿島神宮の西に位置する根本寺。

「夜舟さしくだして、かしまにいたる。昼より雨しきりに降りて、月見るべくも非ず。ふもとに、根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて、此所におはしけるといふを聞きて、尋入てふしぬ。」

素直に読めば、隠居している仏頂を根本寺に訪うたと読める。しかし、仏頂禅師の自伝「山庵記」のなかに「貞享元年より同4年末まで阿玉の大儀寺の住職となる」との記載があるので、仏頂は大儀寺にいたとの説もある。時間的には夜舟で大船津に着いたのは14日の夜間であろうから、一休みして阿玉まで歩けば辻褄は付くが。

この時期、仏頂は根本寺住職の辞職を願い出てはいたが、後任に引き継いだのは貞享4年の11月で（鹿野貞一氏著：仏頂和尚）、9月ではまだ住職の席は残っていたかもしれぬ。また、仏頂が根本寺住職辞職後も境内に寝起き出来る長興庵という隠居場があったようでもある。さらに、当日、仏頂禅師が大儀寺から根本寺に芭蕉らに会いに来たという説までである。

次に、帰路に立ち寄ったらしい自準とは何者？自準の家とはどこか？これも曖昧。

時代は下って、宝暦2年（1752）、水戸に松籟庵秋瓜という宗匠がいた。秋瓜は芭蕉の「鹿島詣」を模刻して出版したが、この序文に、「芭蕉直筆の鹿島記行が自準に家に伝わっている。自準は潮来の医師本間氏で、芭蕉は鹿島往來の帰路、潮來の自準の家に宿った」と記載している。本間氏とは本間道悦で、松江の俳号を持つ。芭蕉は日本橋時代、道悦から病む胃の治療を受けていたようで、芭蕉が日本橋から深川に移った翌々年、道悦は潮來に移り診療所を開業している。

しかし、丁度貞享4年に出た俳諧誌「続虚栗」には、松江の句と共に自準の句も掲載されている。となると、松江（道悦）と自準は異なる人物であると考えた方が妥当である。自準とは小西似春の後号で、行徳の神主となった。かくして、松江＝自準説は秋瓜の捏造であつたらしいことが、加藤定彦氏の「俳諧の近世史」1998に記載されている。（常磐大学人間科学部紀要：二村博：2015.9）

潮來には本間自準亭跡の標識があり、その近くの長勝寺境内には自準亭で芭蕉らが詠んだとされる3句の碑もある。いつから、自準亭と呼ばれるようになったのであろうか。

芭蕉のこの旅では、行徳は旅のルートに入っており、潮來も鹿島近隣。芭蕉が潮來の自準亭で病んでいた胃の治療を受けたという説、いやいや、行徳でという説の真偽は如何。「鹿島詣」の記載があまりにも断片的で説明がない故に、憶測の材料になってしまう面白さがある。

これらの興味を抱きつつ、この行程を妻と追隨した内容は次回。（パートナー 小松）

<編集後記>**

「香澄第28号」編集に当たり、国及び県の緊急事態宣言、非常事態宣言を受けて、構成については書面で行いました。とはいえ、ご提供頂ける予定の限られた原稿を確認しただけですが。

お陰様で追加調整により、6頁構成の体裁を整えることができました。ご執筆下さいました皆様、有難うございました。

新型コロナウイルス感染症は、ワクチン接種の進行に伴う効果もあり、小康を見せながらも依然として私たちの日常を脅かしています。目に見えない病原との出口の見えない闘いに加え、繰り返される自然災害、気候変動は既に始まっています。

私たちの身近な環境を守る地道な活動が、これらの脅威を解消するとは思えませんが、人類の進歩の過程にその真因があるとすれば、悠久からの自然を大切に、あの豊かだった環境に少しでも近づけられるよう、将来につながる活動を進めていければと思っております。

これからもパートナー活動を通して、地域との繋がりを広げながら、環境保全の輪を広げていきたいと願っています。（パートナー 栗原）